

墓の彼方からの手紙 : エッツェル版『パルムの僧院』の編集をめぐって

高木, 信宏
九州大学大学院人文科学研究院 : 准教授

<https://doi.org/10.15017/26089>

出版情報 : Stella. 31, pp.209-226, 2012-12-18. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

墓の彼方からの手紙

——エッツェル版『パルムの僧院』の編集をめぐって——

高 木 信 宏

ジュール・ヴェルヌの連作「驚異の旅」を手がけたことでつとにその名を知られる編集者ピエール＝ジュール・エッツェルは1845年12月、『スタンダール作品集』の第1回配本として『パルムの僧院』を出版した¹⁾。作家が不帰の客となってから3年と10カ月後のことである。生前に公刊された著作に未定稿をくわえた作品集の企画を新進気鋭の書店主にもちかけたのは、スタンダールの母方の遠縁にあたり、幼少の頃より終生交誼を結んだロマン・コロンのことである。彼が同年の2月13日にエッツェルと交わした契約書によれば、1838年に創始された画期的な「シャルパンティエ叢書」と同じ18折のコンパクトかつ大容量の判型を採り、頒価も一般大衆が手をのばしやすい25センチメートルに抑えて、1万部の売り上げが当て込まれていた²⁾。いわゆる今日の「フォリオ叢書」のようなポケット版文庫のはしりであったものの、ウージェーヌ・シユーのような流行作家ならばいざしらず、生前に文名を馳せていたとはいいがたいスタンダールが多数の「幸福者」を獲得するには未だ機は熟しておらず、初の作品集の企ては1846年に刊行された第2巻目、『赤と黒』をもってあえなく頓挫してしまう。

短命に終わり、大量の在庫と少なからぬ損失をエッツェルに残した『スタンダール作品集』であったが³⁾、しかしながら校本としての学術的な価値はけっして小さくない。別稿でとりあげたようにエッツェル版の『赤と黒』には初版の本文に対する〈前テキスト〉として位置づけられるいくつかの重要な異文が含まれていて⁴⁾、我々を小説の創作過程の究明へと誘う。同様に『パルムの僧院』にも一考に値するヴァリエーションが存在しており、加除の修正や覚書が記された作家の自家用本のいずれかに照らしてコロンの校訂した、同版ならではの特殊な編集の事情を窺わせるのである⁵⁾。

さて、後者の異文についての調査報告はまたの機会に譲ることにして、小論では同書に収録された別の奇妙なテキストをとりあげたい。それは1840年10月にスタンダールがバルザックに送ったとされる手紙である。後に研究者のあいだで出所の正当性に対して疑義がもたれ、1934年のディヴァン版以降に編まれた書簡集からは姿を消してしまうこの書状が、そもそものような経緯でエツェル版に収録されるにいたったのかについては、依然として真相は謎に包まれたままである。以下では、近年にもたらされた実証的な知見にもとづきながらこの問題を検討し、書簡を活字にしたコロンの真意について新たな仮説を提出する。

1

はじめにロマン・コロンのプロフィールについて、スタンダールとの関係を中心に概観しておこう。彼は作家が生まれた翌年、1784年にリヨンで生を享けた。4年後に家族がグルノーブルに転居すると、スタンダールの母の実家であり、コロン家とは縁戚関係にあったガニオン家を介して両者は知り合い、同市中央学校の学生時代を通じて交友を深めてゆく。そうした彼らの親交については、たとえば『アンリ・ブリュールの生涯』の第32章で回想される「友愛の樹」事件にその一端を垣間見ることができる⁶⁾。逸話では危険な悪戯の共犯者として若きスタンダールに付き従うコロンの姿が寸描されており、当時から彼は作家が心を許す数少ない遊び仲間だった。

成年に達したコロンは1804年、フランソワ・バルベ＝マルボワを大臣に戴く財務局に出仕した。1825年に職を退くまで、ジュネーヴ、モンブリゾン、パリで勤務したのち、退職後は通送や駅馬車輸送を扱うメサジュリー・ロワイヤルに再就職して、1830年から55年まで経理課長を務めている⁷⁾。このように一貫して経理畑を歩んだコロンは、環境が人をつくった典型であり、実直かつ慎重な人柄は「真のブルジョア」⁸⁾とスタンダールに揶揄されたりもするのだが、とはいえ律儀でまじめな性格であったからこそ、作家は1830年以後、チヴィタ＝ヴェッキアのフランス領事としてパリを離れる期間には手紙の受け渡しや出版社との交渉をコロンに委ねたばかりか、彼を遺言執行者を選び、後事を託したのだと思われる。

スタンダールの信任が裏切られることはなかった。『アンリ・ブリュールの生涯』の第21章には、「友人のコロンは〔…〕私のためなら刑罰など恐れぬ人物だ」⁹⁾という評言があるが、畏友の没後、その名声を高らしめるために一途に尽くすコロンの献身は、作家が寄せていた篤い信頼に申し分なく応えるものであろう。ヴィクトル・デル・リット編『スタンダール総書簡集』に収められたコロン送受信の書簡は、どれひとつをとっても、亡き友に捧げる彼の尽力と奔走が余人にはとても真似のできぬものであることを証している。1842年3月22日にコロンは、パリのヌーヴ＝デ＝キャピュシーヌ通りで作家が脳卒中で倒れ、介抱されているところに来合わせて、翌未明、搬送先のホテルで最期を看取ると、悲しみにくれる間もなく煩瑣で骨の折れる仕事——肉親や朋友への訃報の通知、略歴の執筆、葬儀の手配と墓所の確保、パリならびにチヴィタ＝ヴェッキアの遺品整理と移送にかんする諸作業、遺産・遺品の目録作成、相続人や友人への遺産・遺品の分配あるいは遺贈等々——を一手に引き受けたのである¹⁰⁾。

しかも他方でコロンは、スタンダールの亡くなった年に作品集の出版を敢然と決意するや、その実現に邁進した¹¹⁾。作家のもうひとりの親密な幼友達でグルノーブルに住まうルイ・クロゼと連絡をとり合い、彼に遺贈された未定稿を手元に預かって¹²⁾、『ナポレオンの生涯』や『緑の狩人』などの作品を選んで出版に備えている。またコロンはエッツェルとの交渉に成功すると、こんどは書簡集を編むためにスタンダールと交際のあったジュール・ゴーチエやサラ・ド・トラシー等から作家の手簡を借り受けて、書簡集刊行のための準備を着々と進めたのである¹³⁾。

誰にでもできるわけではない作品集の編纂という大仕事を前にしてコロンが少しも逡巡しなかったのは、書物の出版に多少ともかかわった経歴があったからでもあろう。彼は自由主義の新聞『レ・コミューヌ』紙(1830-31年)の創刊に参加した後、1833年に著書『イタリア・スイス旅行記』を上梓し、次いで3年後には、グルノーブル中央学校時代の恩師であった画家ルイ＝ジョゼフ・ジェイの追悼のために略歴を公刊するいっぽう、18世紀の思想家として知られるブルゴーニュ法院長シャルル・ド・プロスの書簡集を編んでいる。このような経歴を併せもつコロンにしてみれば、友人の作品集をつくる企てはまったく未知の事柄というわけではなかったはずである¹⁴⁾。

だが、そういったキャリアにもまして、コロンの使命感にはスタンダールの執筆を手伝った経験と自負が関わっているのではないだろうか。『ローマ散歩』(1829年)がその代表的な事例であり、コロンは作家のもとに日参して材料や助言を授け、執筆から校正にいたるまで細々とした手助けをしている¹⁵⁾。同書の出版契約がドロネー書店と交わされる一月前の同年2月17日、スタンダールが友人アドルフ・ド・マレストに宛てて、「コロンと私のように、仲の良い賢明な友人ふたりなら、3フランか2フラン50サンチームの立派な8折判を出版して、1巻につき20スーを稼ぐことができるでしょう」¹⁶⁾と書き送ったように、『ローマ散歩』はまさしくコロンとの共同作業の賜物であった。『ある旅行者の手記』(1838年)の出版でも、作家は原稿の清書に先立ってコロンに草稿を読んでもらい、彼に意見を求めている。そのときの後者による所見メモが残されているが、デル・リットによればコロンの問題視した箇所は刊行されたテキストからすべて削除されているという¹⁷⁾。かかる事実からも、いかにスタンダールが従弟を信用していたのかが窺い知れよう。

このようにコロンの足跡を辿るならば、エッツェル版『スタンダール作品集』は友情に駆り立てられた素人の仕事ではないと間違いなくいえようが、しかし研鑽を積んだ学者の手による実証的で客観的なそれとも性質を異にすることもまた本当であろう。常日頃から作家の言動に身近で接し、その執筆活動を見守り手助けしてきたコロンであればこそ、数多の遺稿や自家用本への書き込みを目にした際の感慨は察するに余りある。今日の校訂版を繙くならば、彼がスタンダールの草稿等に通じつに丁寧に目を通し、記憶を頼りに日付や註を付すなどして、それらの整理に努めたあり様が看取できよう。おそらく、そうした作業を丹念にこなすコロンの脳裏には、草稿に記された片言隻句をきっかけに、在りし日に作家と交わした会話が蘇ったのではないだろうか。その意味ではコロンにとって一語一文の精読は、死者との対話のごとき追憶の営みだったと考えるまでも差しつかえあるまい。とはいえ、亡き友人の意思を汲もうとするあまり、著者への同一化という心理的な機構が働かなかったとは言い切れまい。否、むしろそう考えるのでなければ、『パルムの僧院』の新版を編む折りに彼のくだした判断はとうてい理解しがたいのだ。すなわち、スタンダールがバルザックに送ったとされる1840年10月30日付書簡の収録にほかならない。

2

周知のようにバルザックは1840年9月25日、自ら編集する『ルヴェ・パリジエヌ』誌第3号に「バール氏研究」と題して『パルムの僧院』評を掲載した。この評論をチヴィタ＝ヴェッキアで翌月15日に受けとり¹⁸⁾、文壇の大御所による望外の厚情に感激したスタンダールが、謝意を表するために書いたのが問題の手紙である。実物は見つかっていない。だが、グルノーブル市立図書館が3種の下書きを所蔵しており、さらに現存を裏づける別の書面もある——「コロン氏（5時にゴドー・ド・モロア通り35番）が、私の感謝の印として1840年10月に貴兄に献じた長文の手紙をもっています」（1841年4月4日付バルザック宛書簡）¹⁹⁾。

コロンはスタンダールの「礼状」をバルザックの「バール氏研究」と併せてエツェル版『パルムの僧院』に収載した。彼は「礼状」をミシェル・レヴィ版全集の同小説（1854年）と『スタンダール未刊書簡集』（1855年）に再録し、さらにシャルル・ボス版書簡集（1908年）を編んだアドルフ・ポープがコロンのテキストを採用したため²⁰⁾、その存在は世に知られ、研究者の注目を集めることになる。まずポール・アルブレが「礼状」の内容と草稿3通をつぶさに比較検証し、コロンが下書きに手をくわえたテキストであると看破した。同様にアンリ・マルチノも草稿の「寄せ集め」と判断し²¹⁾、プレイアッド版に続いてシャンピオン版の書簡集を編纂したデル・リットは、先達たちの見解を支持したうえで、バルザック宛礼状の現物が未発見であり、いつ頃届いたかも不明である旨を注記して、作家やコロンによる書き込みを含め、3草稿の全文を執筆の順に収録している²²⁾。

もちろん、「礼状」の真贋にかんするアルブレ等の解釈に異を唱えるつもりはない。しかしながら、なぜコロンが悪く言えば偽造とも受けとられかねない行動にでてしまったのかという、これまで看過されてきた問いについては改めて検討する必要があるだろう。なぜならコロンの行為は、彼の律儀で細心に事を運ぶ性格にはおよそそぐわないからである。おそらくその背景には、彼の決断を許す状況があったはずだ。結論からいえば、スタンダールが送った礼状の本物のほうは、ついでバルザックの手元へは届かなかったのではあるまいか。そう考えるならば、エツェル版編纂の際にコロンのとった行動はすべて辻褃が合う

のである。

当初コロンがエッツェルと交わした契約書には、『パルムの僧院』の巻頭に前者の筆によるスタンダールの「略歴」を付すことだけが申し合わされていた。ところが、書店主は売り上げに利する方策として「ベール氏研究」で冒頭を飾るアイデアを思いつき、転載の許可をバルザックから貰うようコロンに手紙で依頼する²³⁾。書簡の日付は1845年11月1日、もはや小説の刊行まで2カ月を切った段階である²⁴⁾。このときまで、エッツェルもコロンも問題の「礼状」を収録することは念頭になかったはずだ。なぜなら、バルザックが評論で示した批評や助言を踏まえて「礼状」は書かれており、単独ではスタンダールの考えを十分に理解できないからである。はじめて「礼状」についての記述が関連資料中に登場するのは、コロンが1845年末に書いたとされる広告ビラの草案であるが、そこでは「礼状」と評論とが一対をなすかたちで扱われている——「ド・バルザック氏による彼〔ベール〕についての研究とベールの返信 *une lettre de Beyle en réponse*」²⁵⁾。付言すれば、執筆の経緯を含めて書簡の草稿を熟知していたコロンのほうから、エッツェルに「礼状」の収録をもちかけたと思えてまじ間違いあるまい²⁶⁾。

エッツェルから依頼を受けた翌日、コロンは早速バルザックに評論転載の許可を請う手紙を送っている。残念ながらその書簡は未発見だが、幸いにもコロンに対するバルザックの返信のほうは現存する。約3カ月後の1846年1月30日、小説家はようやく返辞を投函した。その冒頭で彼は返信が滞ってしまった失態を長々とコロンに詫びたあと、評論の転載を快諾し、唯一一つの交換条件として「私がこよなく愛する彼〔スタンダール〕の作品集」を1部分けてくれるよう提案するのである²⁷⁾。

すでに『パルムの僧院』は公刊されていた。エッツェルは前年末、バルザックの許可を待たずに出版に踏み切ってしまったのである。しかし、その事実より以上に興味深いのは、コロン宛の返信のなかでバルザックが同時に収載される「礼状」についてはまったく触れていないという点だ。誠実なコロンであれば、とうぜん小説家の手元にある書状のオリジナルを借り受けて転写し、掲載の許可を求めたはずである²⁸⁾。そうであればバルザックのほうもなにかしら返答しているはずだが、それが無い。すると、コロンは前信のなかで「礼状」にはいっさい言及しなかったのではないか。彼がスタンダールの書簡が届かな

かったことをもとより承知していたならば、これは十分にありえる話である。

ここで礼状の受け渡しをめぐる 1840 年当時の状況を振り返っておこう——。10 月 30 日にスタンダールは感謝の手紙をバルザックへ直接送らずに、コロンの転送を頼んでいる²⁹⁾。理由としては、イタリア滞在中のため、バルザックの所在を把握し難かったことが挙げられよう。後者はこの頃、債鬼を遁れる日々を送っており、連絡をとるのが難しかった³⁰⁾。同様の障碍は、すでに前年の春、パリにいた両者の文通に透けて見える。スタンダールは同月 29 日付の書状で、『パルムの僧院』を献呈したいのだが、ホテルの門衛が「カッシーニ通り 1 番」に行きたがらないと告げ、「ときには貴兄もキリスト教の国にいらっしゃるでしょうから、まともな住所、たとえば書店などの」住所を教えてくれるか、あるいは自分の逗留先まで受けとりに来てくれるよう求めている³¹⁾。これに対する返信でバルザックは仮寓の住所「リシュリュエ通り 108 番」を伝えながら、面白いことに「私がパリにいて、数日の予定で滞在」する際の、と書き添えている³²⁾。

バルザックの韜晦はコロンをも煙に巻いた。1840 年 10 月末から 5 カ月が過ぎても彼が依然として文豪の居所を見つけられずにいたことは、前掲のスタンダール書簡（1841 年 4 月 4 日付）に明記されている³³⁾。従弟の住むゴドー・ド・モロア通り 35 番で礼状と特製の『パルムの僧院』を受けとって欲しいと請うこの手紙じたいは、むしろコロンの手を介してバルザックに送られたのではない。気付に記された名前はアルフォンス・カール、諷刺雑誌『レ・ゲップ』を主宰していた小説家・ジャーナリストであり、1836 年に再刊した『フィガロ』紙の主筆を務めた経歴をもつ³⁴⁾。ただしスタンダールが彼と親しく交際していた形跡はなく、実際、宛先はカールの住所ではなく『レ・ゲップ』誌のそれになっている³⁵⁾。おそらくスタンダールが藁にも縋る思いでバルザックの仕事仲間に書状を託した、というのが真相であろう。カールからいつ後へ手紙が届けられたのかは不明だが、スタンダールが 41 年 5 月 28 日付の書簡で、上記の『パルムの僧院』をバルザックが落掌したかどうかをコロンに尋ねているので、この時点になってもまだ事が成就していないのは明らかである³⁶⁾。

これに絡んで見過ごせないのは、同じ頃にコロンが転居している事実である。彼は同年 7 月に上記のゴドー・ド・モロア通りからノートル・ダム・ド・グラス通り 3 番に居を移している³⁷⁾。転居の予定は事前にスタンダールにも知らさ

れており、先のバルザック宛書簡（同年4月4日付）では署名の下に従弟の現住所と勤務先住所を併記し、もう一葉の便箋のほうに「R・コロソ氏、ノートル・ダム・ド・グラス通り3番ないしはゴドー・ド・モロア通り35番」と書き足されている³⁸⁾。とはいえ、後年にコロソがバルザックに宛てた手紙を読むと後者が新居を訪ねたとは考えにくく³⁹⁾、擦れ違いの劇が生じなかったとはいきれまい。

3

バルザックが礼状を落し手しなかった蓋然性がこれまで検討されてこなかった背景には、前述した彼のコロソ宛返信（1846年1月30日付）の記述が少なからず影響しているように思われる。それはバルザックが、スタンダールと交わした『パルムの僧院』改削の約束に触れた次のくだりである――

彼〔スタンダール〕が急逝したことには誠に心が痛みます。私たちは『パルムの僧院』に鉋を振るうはずでした。版を新たにしていたら、小説は完璧で非の打ち所のない作品になったことでしょう。⁴⁰⁾

斧正をめぐり彼らがいつ合意したのかが問題の焦点となる。従来の研究において、スタンダールによる加除の修正は「ベール氏研究」の受取を境にして2つの時期に大別されてきた⁴¹⁾。最初の段階は1839年11月から翌年の10月にかけてであり、これは作品刊行後に間紙綴じ込みの手沢本に訂正等を気ままに書き込むという、従来の習慣に従った修訂と考えられている。他方、1840年10月中旬に始まる改削のほうは、「ベール氏研究」で示された具体的な指摘の数々をその動機にしている。スタンダールは10月ないしは11月中旬に白紙を綴じた自家用本をイタリアで新たに特注し、第1巻の最初のフォリオに、「これは『僧院』第2版に使用される原稿である。ド・バルザック氏の助言に対する敬意から手直した原稿」と書きつけている⁴²⁾。

この頃、作家はバルザックにさらにいっそうの意見・協力を請うために、特別製本の『パルムの僧院』をもう一揃い^{あつら}誂えたと考えられる。というのも、1841年4月4日付の書簡で彼はバルザックに礼状の受けとりを求めるいっぼうで、「貴兄に彼〔コロソ〕が、ご意見を必要とする白紙挟み綴じの『僧院』をお渡し

します」(強調は引用者)と伝えているからだ。以上の文脈を踏まえるならば、特装本と同送された書状において、初めて修正への協力が依頼されたと推測することができ、それゆえ従来の研究では、「私たちは『パルムの僧院』に鉦を振るうはずでした」というバルザックの回想は、このときの要請に彼が快く応じたことを指すと暗に解されてきたのではないだろうか。つまりバルザックの証言は、文豪がスタンダールの礼状を落掌した根拠と見做されてきたのである。

ところが両作家が約束を交わした時期は、近年の知見によってさらに遡る可能性が出てきた。1839年3月27日の刊行直後にスタンダールがバルザックに献じた『パルムの僧院』2巻が2005年になって見つかったのである⁴³⁾。じつは同書冊はすでに1912年にはルーフ・ド・モンジェルモンの競売カタログに記載されていたのだが、第1巻仮扉の「今世紀の小説家の第一人者へ」という献辞の下に署名された偽名とイニシアル「Frédéric S」を、古書の専門家が『悪魔の回想録』の著者フレデリック・スーリエととり違えてしまったため、現所有者のアルフレッド・エルヴェ＝グリュイエが気づくまで、その存在は世に埋もれたままだったのである⁴⁴⁾。

注目すべきことに第2巻の表紙には、一読しただけでは意味が判じ難い走り書きがスタンダール自身の手で記されている⁴⁵⁾。バルザックは1839年4月5日付の手紙で献本の落掌をそれとなく示しているが⁴⁶⁾、スタンダールの書き付けは同書簡の内容を踏まえているばかりか、末尾には4月11日の日付が打たれているのだ。複数の専門家による鑑定の結果、作家の手蹟に間違いなく、しかも両巻が一揃えであるのもまず確かなことから、いかなる経緯でスタンダールがバルザックの落手した本に覚書を残しえたのかが問題となった。

備忘の内容にかんしてエルヴェ＝グリュイエは、スタンダールが当日、パリのイタリアン大通りでバルザックに出会い⁴⁷⁾、『パルムの僧院』修正協力への同意をとりつけたあと、具体的な意見を求めるために^{した}認められた手紙の草案であると解釈したが、いかなる次第で彼が献本を手元に持ち帰ったのかについては不明とした⁴⁸⁾。これに対し覚書を別の角度から検討したフランソワ・プロネは、前者による解釈の問題点であった時系列上の矛盾を解消する、よりいっそう説得的な見方を示した。彼の説明によれば、これは依頼状の下書きというよりも、むしろ4月11日に小説の共同修正にかんする合意が両者のあいだで成立し、その証としてスタンダールがリシュリュー通りのバルザックの住居で記した、い

わば両者の「非公式な契約書」なのだという⁴⁹⁾。しかもプロネは、ふたりのあいだで交わされたこの約束こそ、後年バルザックがコロン宛書簡（1946年1月30日付）のなかで、「私たちは『パルムの僧院』に鉦を振るうはずでした」と追想する出来事と解している。もちろん、いずれの解釈をとるにせよ、両作家の合意がこの時点にまで遡るのは疑えまい。では、1839年当時に彼らのあいだでいかなるやりとりがあったのか。

同年3月29日付の書簡で献本のため住所を尋ねるスタンダールに対して、バルザックは日を置かず返信で『コンスティチュシヨネル』紙3月17日号掲載の抜粋（ワーテルローの挿話）を激賞し、同書冊を受けとり感想を伝えることを約束する⁵⁰⁾。さらに、小説読了後の4月5日付スタンダール宛書簡の内容は「ベール氏研究」を先取りしており、そこには衷心からの賛辞といくつかの助言がすでに示されていた⁵¹⁾。なかでも、第2版をすぐに準備することになろうから、思い切って「冒頭の削除すべき冗長な部分」を結末に送ってはどうかというバルザックの進言は、6日後に遭遇した両作家にとって重要な、それゆえに忘れがたい話題となったであろう。このことは献呈本第2巻に書かれた「非公式な契約書」の記述を読めば想像に難くない。

おそらく修正の約束を具体化しようとしたのだろうか。同年6月下旬、任地チヴィタ＝ヴェッキアへの出発を控えたスタンダールは、「ファブリスは何度も立ち寄りましたが、バルザック氏に会えないままパリを去るのを残念がっています」というメッセージを彼に残している⁵²⁾。それから1年と数カ月後、作家の心中で約束の思い出が風化し始めた頃に、あの「ベール氏研究」が到来した。一読感激したスタンダールはただちに翌朝、小説冒頭の54頁を削除し、礼状の執筆にとりかかったのである。

スタンダールの死後、1846年になってバルザックが、「私たちは『パルムの僧院』に鉦を振るうはずでした」と回顧するのは、1839年4月11日にふたりが交わした合意であるならば、もはやこの証言はバルザックが「ベール氏研究」への礼状を受けとったとする根拠にはなるまい。換言するならば、エルヴェ＝グリユイエ等のもたらした知見によって、『人間喜劇』の作者がスタンダールの礼状を落手しなかった蓋然性はいっそう高まったといえようか。

結 語

さて、我々の仮説が正しければ、エツェルから「ベール氏研究」の収録をもちかけられたコロンは、^{くだん}件の書簡をめぐる顛末をおのずと想起したであろう。従兄があればほどまで切望したことである。彼に代わって実現しようという強い意志が、このときコロンの心中に湧き起らなかったはずがない。文学史上に類例のない贅辞に対するスタンダールの感謝の言葉は、活字にすることで今度こそ確実にバルザックへ送り届けられるからである。

とはいえ、コロンによる「礼状」の復元には、『パルムの僧院』本文の校訂が多分に影響したと思われる。彼は手沢本に記された加除の修正や覚書を丁寧に調べるうちに、修正の過程で生じた作家の逡巡を看取したはずだ。「ベール氏研究」を読み、ただちに小説の冒頭部を削ったものの⁵³⁾、スタンダールは3カ月が過ぎた1841年2月5日に、「この導入部のほうがいっそう心を引き込むように思う。私がこの時代を愛しているのは確かだ」とシャペール本に記し、ロワイエ本には「1841年2月9日、ローマ。1796年のミラノの優美な光景とピエトラネラ夫人の性格を尊重して、冒頭の^{ページ}頁を現在の順序のままにする。54頁から第3章あたりまでを短くするだけにとどめる」と書き入れたのである⁵⁴⁾。ところで当時、コロンの他にいったい誰がこれらの意味を正しく理解しえたであろうか。彼がスタンダールの心境の変化を顧慮したことは、1846年1月31日付の返信で彼がバルザックに伝えた次の回想にあらわれていよう――

大兄がご教示になった修正を『パルムの僧院』の著者があの美しい本に施す前に他界してしまったことを、どれほど私は惜しんだことでしょう。彼はそれに真剣に取り組んでおりました。私は為すべき変更が記された草稿を手中にし、草案を丹念に吟味しましたが、長らく躊躇したあげく、改善するつもりでかえって損なってしまうのを恐れて、それらを用いないことに決めました。したがって、『パルムの僧院』はもとのまま新たに刷られたのです […]。⁵⁵⁾

コロンもまた、バルザックの助言にもとづく修正を採用するか否かで思い悩み、最終的に初版の本文を保持したのだが、そうってしまったのも彼が書き込みを読むにつれ、「自らの気持ちに逆らって」⁵⁶⁾改削の筆を執るスタンダールの心の振幅に同調したためであったはずだ。

同様にコロンのスタンダールの心情を汲みとった痕跡は、コロンが再構成したバルザック宛「礼状」にも認められる。書簡の3草稿についてデル・リットは、時の経過とともにやがて作家の心に兆した変化を指摘している。それによれば、当初の歓喜にやがて批評への困惑が混ざった結果、最初の下書きにあった「並外れたエゴチスム」の吐露は削られて、最後のものは「もっと淡泊な手紙」に変わったという⁵⁷⁾。

コロンは「礼状」でこの「並外れたエゴチスム」を復活させた。なぜなら、それこそまさしくスタンダールが真情を述べた文言だからだ——「昨夜『ルヴェユ〔パリジエンヌ〕』を読み、世間に後押しいただいた〔作品〕冒頭の54頁を今朝4、5頁に縮めました。しかしながら貴兄に打ち明けねばなりません、私はこれらの頁を綴りながら、このうえなく深い悦びを覚えました。私は自分が愛するものについて語ったのです」⁵⁸⁾。かくてコロンは1846年1月31日付の返信に添え、自らが手がけた『パルムの僧院』新版をバルザックに贈ったわけだが、むろん彼は単に礼状を届けたのではなかった。ミラノを舞台にする冒頭部を新たに活字におこすことで、亡友が一旦は心の奥底に隠した〈イタリア〉への愛を後世に伝えようとしたのである。

註

- 1) ジャック・ウベールの考証によれば、『ビブリオグラフィ・ド・ラ・フランス』誌がエッツェル版『パルムの僧院』の発行日を1847年10月2日と誤記していたため、46年刊行の『赤と黒』が最初の配本であると誤解されてきたが、実際には前者のほうが先に刊行されていたという。Voir Jacques HOUBERT, «Autour d'un anniversaire: Une lettre inédite de Romain Colomb à Balzac», *Le Courrier balzacien*, n° 62, 1996, p. 34
- 2) Voir STENDHAL, *Correspondance générale*. Édition Victor DEL LITTO avec la collaboration d'Elaine WILLIAMSON, de Jacques HOUBERT et de Michel-E. SLATKINE, Paris: Libr. Honoré Champion, 6 vol., 1997-99, t. VI, pp. 719-721.
- 3) Voir A. PARMÉNIE et C. BONNIER DE LA CHAPELLE, *Histoire d'un éditeur et de ses auteurs*. P.-J. Hetzel (Stahl), Paris: Albin Michel, 1953, pp. 57-59.
- 4) これについては、次の拙論を参照——「エッツェル版『赤と黒』をめぐって」、九州大学人文科学研究院『文學研究』第106輯、2009年、27-44頁。
- 5) 1846年1月31日付バルザック宛書簡のなかでコロンは、死去の25日前にスタン

- ダールが『パルムの僧院』第1巻に施した微修正をエッツェル版の本文に採用したと述べている (voir STENDHAL, *Correspondance générale, op. cit.*, t. VI, p. 753)。作家が改訂に向けて修正を書き込んだ手沢本としては、シャペール本、アザール本、ロワイエ本の3書が知られているが、コロンがエッツェル版のテキストを校訂する際に参照したのが何であるのかは分かっていない。また1840年5月20日付コロン宛書簡には、スタンダールがコロンにより訂正された刊本を受けとり、それをさらに修正して送り返す旨が記されている (voir *ibid.*, t. VI, p. 347)。この事実を踏まえて、ミシェル・クルーゼはコロンの校訂したエッツェル版とミシェル・レヴィ版を考慮する必要性を強調している (voir Michel CROUZET, «Préface», in *La Chartreuse de Parme* de STENDHAL. Édition critique contenant les notes et additions de Stendhal. Texte établi à partir de l'édition originale, présenté et annoté par M. CROUZET, Orléans : Paradigme, 2007, p. LXVIII)。
- 6) STENDHAL, *Vie de Henry Brulard*, in *Œuvres intimes*. Édition établie par Victor DEL LITTO, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2 vol., 1981-82, t. II, pp. 843-850.
 - 7) Voir Jacques HOUBERT, «COLOMB, Romain», in *Dictionnaire de Stendhal*. Publié sous la direction de Yves ANSEL, Philippe BERTHIER et Michael NERLICH, Paris : Libr. Honoré Champion, 2003, pp. 164-165 ; voir aussi Henri MARTINEAU, *Petit dictionnaire stendhalien*, Paris : Le Divan, 1948, pp. 132-133.
 - 8) STENDHAL, *Vie de Henry Brulard*, in *Œuvres intimes, op. cit.*, t. II, p. 730. また、スタンダールは『エゴチスムの回想』の第5章でコロンについて次のように評している——「清廉潔白かつ公正で、思慮分別のある男、私の幼友達である」(STENDHAL, *Souvenirs d'égotisme*, in *ibid.*, t. II, p. 468)。
 - 9) STENDHAL, *Vie de Henry Brulard*, in *ibid.*, t. II, p. 732.
 - 10) Voir Romain COLOMB, «Notice sur la vie et les ouvrages de M. Beyle (de Stendhal), par R. Colomb, son exécuteur testamentaire», in *La Chartreuse de Parme* de STENDHAL, précédée d'une notice sur la vie et les ouvrages de Beyle, par M. de BALZAC, et d'une lettre inédite de l'auteur en réponse à ce travail, Paris : J. Hetzel, 1846, pp. 43-44 ; voir aussi STENDHAL, *Correspondance générale, op. cit.*, t. VI, pp. 597 et 682 ; voir également Jacques HOUBERT, «Un supplément à la *Correspondance générale* de Stendhal : l'Ascension (1842-1853)», *L'Année Stendhalienne*, n° 3, 2004, pp. 303-325.
 - 11) Voir Auguste CORDIER, *Comment a vécu Stendhal*. Préface de Casimir STRYIENSKI. Avec un portrait inédit en héliogravure, Paris : V. Villerelle, 1900, pp. 98-103.
 - 12) スタンダールの遺稿にканしては、パリに残された草稿はコロンから相続人であるクロゼに送られ、チヴィタ＝ヴェッキアのは、コロンの指示により1842年8月

- にドナート・ブッチからクロゼのもとに届けられた。後者はそれらを整理して出版に向けた作品選定の準備を調べている (voir STENDHAL, *Correspondance générale*, *op. cit.*, t. VI, pp. 669-675)。しかし 1844 年 4 月 10 日付の手紙でクロゼはコロンの作品集の仕事を委任した。なお、後者のもとに遺稿と作家の書き込みのある自家用本が送られることになるが、全集の刊行を目指すコロンに対して、クロゼは一部の作品を除いた選集を提案している (voir *ibid.*, t. VI, pp. 702-703 et 742-743)。
- 13) デル・リットはサラ・ド・トラシーのコロン宛書簡にかんする日付推定の根拠として、コロンの積極的にスタンダールの書簡を探し始めたのが 1846 年であると注記している。Voir *ibid.*, t. VI, pp. 774-775.
 - 14) Voir HOUBERT, «COLOMB, Romain», in *Dictionnaire de Stendhal*, *op. cit.*, p. 164. スタンダールはコロンの著書を賛美する書評を執筆し、プロスの書簡集には序文として「1836 年に喜劇は不可能である」と題した文章を書いている (最終的にはコロンのより不採用)。こうした点にも、両者の密接な協力関係の一端を認めることができよう。
 - 15) Voir COLOMB, *op. cit.*, pp. 57-59. 1829 年 1 月 15 日付マレスト宛書簡でスタンダールは次のように記している——「誠実なコロンは毎朝、私と一緒に精を出しています。もう 2 巻分の原稿を渡す用意ができました。ゆうに 3 巻を出版するに足る材料があります」(STENDHAL, *Correspondance générale*, *op. cit.*, t. III, p. 704)。
 - 16) *Ibid.*, t. III, p. 714.
 - 17) Voir Victor DEL LITTO, «Notice», in *Mémoires d'un Touriste*, in *Voyages en France*. Textes établis, présentés et annotés par V. DEL LITTO, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1992, pp. 872-873.
 - 18) Voir Jacques HOUBERT, «Chronologie des relations entre Balzac et Stendhal», *Le Courrier balzacien. La Chartreuse de Parme lue par Balzac*. Nouvelle série n° 19, avril 2012, p. 21; voir aussi STENDHAL, *Correspondance générale*, *op. cit.*, t. VI, pp. 286 et 415.
 - 19) BALZAC, *Correspondance*. Édition établie, présentée et annotée par Roger PIERRO et Hervé YON, Paris: Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 2 vol., 2006, t. II, p. 878.
 - 20) Voir STENDHAL, *Correspondance inédite*, précédée d'une introduction par Prosper MÉRIMÉE de l'Académie française, ornée d'un beau portrait de Stendhal, in *Œuvres posthumes de Stendhal*, Paris: Michel Lévy frères, 18 vol., 1853-55, deuxième série, pp. 293-299; voir aussi STENDHAL, *Correspondance de Stendhal*, publiée par Adolphe PAUPE et Paul-Arthur CHERAMY, sur les originaux de diverses collections. Préface de Maurice BARRÉS de l'Académie française, Paris: Charles Bosse, 3 vol., 1908, t. III, pp. 273-274.
 - 21) Voir Paul ARBELET, «La véritable lettre de Stendhal à Balzac», *Revue d'Histoire littéraire de la France*, t. 24, 1917, pp. 544-545; voir également STENDHAL, *Cor-*

- respondance X (1836-1842)*, in *Œuvres complètes* de Stendhal. Établissement du texte et préface par Henri MARTINEAU, Paris : Le Divan, 79 vol., 1927-37, p. 267.
- 22) Voir STENDHAL, *Correspondance*. Préface et chronologie par Victor DEL LITTO. Édition établie et annotée par Henri MARTINEAU et V. DEL LITTO, Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 3 vol., 1962-68, t. III, pp. 730-731 ; voir aussi STENDHAL, *Correspondance générale*, *op. cit.*, t. VI, pp. 415-416.
- 23) STENDHAL, *Correspondance générale*, *op. cit.*, t. VI, p. 745 ; voir aussi CORDIER, *op. cit.*, pp. 128-129.
- 24) エッツェル版『バルムの僧院』には1846年と刊行年が記されているが、ウベールは『プレス』紙1845年12月22日号の広告やコロンの備忘にもとづき、実際の発行時期が1845年12月下旬であったことを明らかにした。Voir Jacques HOUBERT, «A-tour de la Notice de Romain Colomb sur Stendhal (*documents inédits*)», *L'Année Stendhal*, n° 1, 1997, p. 145.
- 25) STENDHAL, *Correspondance générale*, *op. cit.*, t. VI, p. 747.
- 26) 1840年10月22日付書簡でコロンは、バルザックに返信する意向と『バルムの僧院』冒頭部の大幅な削除とを、スタンダールから知らされている (voir *ibid.*, t. VI, pp. 416-417)。その後、バルザック宛礼状の回送を託されたコロンは、とうぜん執筆の経緯も手紙の受け取りをめぐる顛末も知っていたはずである。なお、礼状の最初の下書きには彼の手で、「1840年10月30日にチヴィタ＝ヴェッキアからド・バルザック氏へ書き送られた手紙の草稿（要浄書）。最良のバージョンを選ぶこと（済）」と記されている (*ibid.*, t. VI, p. 414)。
- 27) *Ibid.*, t. VI, pp. 749-750.
- 28) バルザックが存命であり、その手元には手紙のオリジナルがあると知っているながら、あえてコロンが許可を求めずに「礼状」を活字にしたとは考え難い。しかも彼は個人のプライバシーを侵害しないよう慎重を期していた。たとえば、『アンリ・ブリュラルの生涯』のなかで名指しで批難されたグルノーブルの人々に対する配慮をクロゼから説かれて、コロンはその出版を見送っている (voir *ibid.*, t. VI, pp. 709 et 713)。また彼はゴーチエから書簡の出版の際にいくつかの固有名詞を削除し、イニシアルだけを残すよう求められた件でも、ミシェル・レヴィ版書簡集でその約束をきちんと守っている (voir *ibid.*, t. VI, p. 759)。
- 29) Voir Victor DEL LITTO, «Préface», in *La Chartreuse de Parme* de STENDHAL. Exemplaire interfolié Chaper. Préface, transcriptions et notes par V. DEL LITTO, Paris : Cercle du Livre Précieux, 3 vol., 1966, t. III, p. 23.
- 30) スタンダールがチヴィタ＝ヴェッキアで『ルヴュ・パリジエンヌ』誌第3号を受けとったちょうど同じ頃、バルザックのほうは債権者から逃れる仕掛けで今日よく知られる、パッシー地区バス通り19番のアパルトマンを借りている (voir BALZAC, *Correspondance*, *op. cit.*, t. II, p. XXXI)。このことがバルザックと面識のないコロンには災いしたのは確かであろう。同様の状況は以前から長期にわたって続いたよ

うで、編集者イポリット・スーヴランは、1840年5月14日付の書簡でバルザックにこう苦情を述べている——「敬愛する先生、いったいどうなさったのでしょうか。4つもご住所があって、もう私はどこで先生をつかまえてよいのか分かりません。もう何がなんだか分からなくなっていました」(*ibid.*, t. II, p. 746)。

- 31) *Ibid.*, t. II, p. 469.
- 32) *Ibid.*, t. II, pp. 470 et 1134. 『スタンダール総合書簡集』では、この手紙には「1839年3月20日」という日付が打たれていたが、ウベールによって日付はコロンの筆跡であり、また日付の推定にも誤りがあることが指摘された (voir Jacques HOUBERT, «Petit problème de chronologie à propos d'une lettre de Balzac à Stendhal», in *Le Courrier balzacien*, n° 86, 2002, pp. 20-26)。
- 33) *Ibid.*, t. II, p. 878. 書簡には、「彼〔コロン〕は貴兄を見つけることができません」と書かれている。
- 34) Voir *ibid.*, t. II, pp. 1357-1358. 両者が知り合った時期は未詳であるが、1836年にはバルザックの主宰する『クロニック・ド・パリ』紙へカールが寄稿したり、あるいはカールが『フィガロ』紙にバルザックの小説掲載をとりつけたりしている。
- 35) 1841年4月4日付の書簡に記された宛先の住所は、『レ・ゲップ』誌の当時の所在地、ヌーヴ・ヴィヴィエンス通り46番である (*ibid.*, t. II, p. 878)。スタンダールとカールの関係にかんしては、前者の書簡集にも日記にも交際の足跡を辿ることはできない。おそらくスタンダールはカールがバルザックと仕事上のつきあいがあることを覚えていて、手元の『レ・ゲップ』誌(1840年12月号と翌年1月号)を頼りに手紙を投函したのだと思われる (voir Gian Franco GRECHI (éd.), *Catalogo del fondo stendhaliano Bucci*. Prefazione di Victor DEL LITTO, Milano: All'insegna Del Pesce d'oro, 1980, p. 109)。
- 36) STENDHAL, *Correspondance générale*, *op. cit.*, t. VI, p. 477.
- 37) *Ibid.*, t. VI, p. 654.
- 38) BALZAC, *Correspondance*, *op. cit.*, t. II, p. 878. 活字に組んでわずか10行ほどの文中に、コロンの現住所が3回、勤務先のそれが2回、そして転居予定先が1回記されているのを目にすると、なんとかしてバルザックに礼状と『バルムの僧院』特装本を届けようと手を尽くすスタンダールの切実な思いが伝わってくる。
- 39) スタンダールの没後、約3年の歳月が経過した1845年3月10日、バルザックの住所を後者と関係の深いエツェルからようやく入手できたコロンは、遺贈にかんする手紙を小説家に送っている——「私がペール氏による遺言状の条項のひとつを履行することができるのはエツェル氏のおかげです。その条項によってペール氏は私に、生前、彼に友情を寄せてくださった方々へ形見の品として一冊の本を贈ることを託しております」(STENDHAL, *Correspondance générale*, *op. cit.*, t. VI, p. 731)。バルザックに贈られた故人の蔵書が何であったかは不明だが、興味深いのは手紙の本文の下におかれた住所の記述である。そこには「ノートル＝ダム・ド・グラース3番、ラ・マドレーヌの傍」とあるように、住所に地理的な情報が添えられている

のだ。コロンがこう記したのは、バルザックが彼の新居へはまだ一度も足を運んだことがなかったからだと考えられよう。

- 40) *Ibid.*, t. VI, p. 749.
- 41) Voir DEL LITTO, «Préface» pour *La Chartreuse de Parme*, *op. cit.*, t. III, pp. 11-27; voir aussi Paul ARBELET, «Stendhal, Balzac et les corrections de la *Chartreuse*», *Revue de Paris*, 1^{er} avril 1922, pp. 581-602.
- 42) Victor DEL LITTO, «Corrections et additions inédites pour la deuxième édition de *La Chartreuse de Parme*», *Stendhal Club*, n° 31, 15 avril 1966, pp. 197-200. かつての所有者にちなんでロワイエ本の名で知られるこの自家用本は、初版8折判2巻を4折判5巻にし、透かしの入った薄青い紙を綴じたものである。デル・リットは製本の時期を1840年11月としているが、それ以前の日付をもつ備忘も散見するため、10月中であった可能性もある。ウベールによる最新の年譜では、10月から11月とされている (voir HOUBERT, «Chronologie des relations entre Balzac et Stendhal», *art. cité*, p. 21)。
- 43) 刊行の日付は、従来1839年4月6日とされてきたが、実際には同年3月27日だったことがウベールによって明らかにされた (voir Jacques HOUBERT, «Quand un H. B. rencontre... un autre H. B.», *Le Courrier balzacien*, Nouvelle série, n° 19, avril 2012, p. 5)。この指摘によって、バルザックへの献本に言及するスタンダールの同年3月29日付前者宛書簡は、編年史的にみて正当な位置におさまった (voir STENDHAL, *Correspondance générale*, *op. cit.*, t. VI, p. 175)。献本の書誌的な詳細については、現所有者のアルフレッド・エルヴェ＝グリユイエによって報告されている (voir Alfred HERVÉ-GRUYER, «Une découverte: un exemplaire dédicacé de *La Chartreuse de Parme*», *L'Année stendhalienne*, n° 4, 2005, pp. 293-296)。
- 44) Voir HOUBERT, «Quand un H. B. rencontre... un autre H. B.», *art. cité*, p. 5. エルヴェ＝グリユイエは、献本の署名「Frédéric S」の解釈の根拠として、『コンステイチュシヨネル』1839年3月17日号に掲載された『バルムの僧院』の抜粋にスタンダールが「Frédéric de Stendhal」と記名したこと、また同月29日付バルザック宛書簡で「今世紀の小説家の王」という、献呈本の献辞とほぼ同内容の表現を用い、さらに「Frédéric」と同じ綴りで署名している事実を挙げている (voir HERVÉ-GRUYER, *art. cité*, p. 296)。
- 45) 走り書きの原文を次に挙げる——«Je suis rempli de la plus vive / reconnaissance; je prie M. de B [alzac] / détestable, plan *trop long* [sic]. Apeler [sic] / un chat un chat. Je n'ai pas le / sentiment des *longueurs*. Pour rendre / le service complètement effacer les / lignes qui font le péché. Dans mon amour / pour le portrait de ces lieux enchanteurs / je ne sens pas ce qui fait longueur, / je n'entends pas à demi mot.» (*ibid.*, p. 293. 強調はスタンダール)。
- 46) Voir BALZAC, *Correspondance*, *op. cit.*, t. II, pp. 469, 1134 et 1135.
- 47) スタンダールは4月11日に、イタリアン大通りでのバルザックとの遭遇について備

- 忘を残している。Voir STENDHAL, *Journal*, in *Œuvres intimes*, *op. cit.*, t. II, p. 345.
- 48) Voir HERVÉ-GRUYER, *art. cité*, pp. 297-299.
- 49) Voir François BRONNER, «L'exemplaire de *La Chartreuse* offert à Balzac», *L'Année stendhalienne*, n° 6, 2005, pp. 349-353; voir également HOUBERT, «Quand un H.B. rencontre... un autre H.B.», *art. cité*, pp. 9-11. この後ほどなくバルザックは書評を書く約束をしたのであろうか。スタンダールは1839年5月28日に「B氏への返答」と題して覚書を残し、3、40頁の批評を書くのは簡単だが、創作は難しいという旨を記している (voir STENDHAL, *Journal*, *op. cit.*, t. II, p. 349)。
- 50) Voir BALZAC, *Correspondance*, *op. cit.*, t. II, pp. 469-470.
- 51) Voir *ibid.*, t. II, pp. 471-472; voir aussi HOUBERT, «Quand un H.B. rencontre... un autre H.B.», *art. cité*, pp. 6-7.
- 52) BALZAC, *Correspondance*, *op. cit.*, t. II, p. 509.
- 53) 小説の冒頭部についてバルザックは次のように助言した——「それゆえ私はこの本のために、作者がワートルローの戦闘の素晴らしい素描から始め、それに先立つ部分は、フランドルで負傷したファブリスが寝ているあいだに、彼自身によって、あるいは彼について物語られる話に縮めてしまうのが望ましいと思う」(BALZAC, «Études sur M. Beyle (Frédéric Stendalh [sic])», *Revue parisienne*, n° 3, 25 septembre 1840, p. 335)。
- 54) DEL LITTO, «Préface» et «Transcriptions», in *La Chartreuse de Parme*, *op. cit.*, t. III, pp. 26 et 51; DEL LITTO, *art. cité*, p. 201.
- 55) STENDHAL, *Correspondance générale*, *op. cit.*, t. VI, p. 753.
- 56) DEL LITTO, «Transcriptions», in *La Chartreuse de Parme*, *op. cit.*, t. III, p. 51.
- 57) いずれもスタンダールが用いた表現である。STENDHAL, *Correspondance générale*, *op. cit.*, t. VI, pp. 414-415.
- 58) STENDHAL, *La Chartreuse de Parme* de l'édition Hetzel, *op. cit.*, p. 521. 最初の下書き (1840年10月16日付) でスタンダールは、「昨夜『ルヴュ [パリジエンヌ]』を受け取り、今朝『僧院』冒頭の54頁を4、5頁に縮めました。私はこの54頁を綴りながら、このうえなく深い喜びを覚えました。私は自分が愛するものについて語り、小説をつくる技巧のことはまったく念頭にありませんでした」と書いたのに対して、3番目の草稿 (同10月28、29日付) では、「私はこのご厚意に相応しく応えました。昨夜、貴誌を拝読し、世間に後押しいただいた作品の冒頭部54頁を4、5頁に縮めました」という文句のあと、小説冒頭部を擁護する部分を削ってしまう (STENDHAL, *Correspondance générale*, *op. cit.*, t. VI, pp. 400 et 409)。なお冒頭部に対する同様の愛着はバルザック献呈本の覚書にも示されている。